

この一步を確かなものとするために！

—第2回記録史料の保存・修復に関する研究集会参加記—

佐藤 晃 洋

第2回記録史料の保存・修復に関する研究集会が、94年11月24・25日両日にわたって、国立史料館を会場として開催され、北は北海道から南は大分県まで、のべ200名の参加があった。

研究集会は、「記録史料の保存・修復に関する理論と技術の発展をめざして」を総合テーマとし、ふたつの小テーマから構成されていた。

テーマ1は「災害から記録史料を守る—世界からの報告—」であり、報告者はICAの文書館防災委員会のために来日されていた各国の防災専門家をはじめとする方々がいった。

小川雄二郎氏によるテーマ1の概要説明の後、総論としてICA防災委員長イングマル・フロイド氏(スウェーデン)が「ICAと防災活動」と題してICA防災委員会の活動概要の説明、ジョン・マッキンタイア氏(イギリス)が「防災計画の開発と災害リスクの管理」と題して防災計画の必要性和具体的方法などの説明をおこない、その後、スライド映写を交えて、記録史料の防災について各国の実践を中心とした報告・提言がなされた。内容は、ブレンダ・バンクス氏(アメリカ)「災害対策の12のステップ」、ジョン・マッキンタイア氏「スコットランド国立図書館の事例にみる火災リスクの管理」、イングマル・フロイド氏「スウェーデンの文書館建造物」、遠藤忠氏(八潮市立資料館)「災害に学ぶ史料保存施設—低湿地の一事例」、ジャンヌ＝マリー・デュロー氏(フランス)「フランスの保存と防災」、ミリエンコ・バンディチック氏(クロアチア)「武力紛争および天災と民族文化遺産の保存」の6本であった。いずれも、それぞれの国における災害—火災・水災・地震をはじめ戦争なども含む—の実例と防災対策に関する報告・提言であり、防災対策の理念と方法についてのさまざまな示唆が含まれていた。これらの報告を拝聴する中で、多くの新知見を得ることができるとともに、自分自身の防災について

の認識不足を痛感した。

特に、火災の際にガス(ヘロン・CO₂など)では消火できても温度が下がらないので史料への悪影響は免れず、水からの史料救助ができるという前提でスプリンクラーを消火に活用しているという事例は、驚きであった。水は史料の敵という認識を改めなければならないであろう。また、戦争から史料を守り後世へ遺そうとする事例を拝聴し、現在利用されている史料群もこれまでの人々による遺すための努力があったからこそ遺されているということ、改めて考えさせられた。

テーマ2は「保存の共通基盤を求めて—文書館・図書館・博物館から—」であり、廣瀬睦氏によるテーマ2の概要説明の後、記録史料の保存利用に携わる施設として文書館・図書館・博物館それぞれの立場から、記録史料の保存利用のあり方についての報告がなされた。内容は、細井守氏(藤沢市文書館)「自治体文書館と史料保存」、庄司明由氏(府中市立中央図書館)「公共図書館における資料保存とその位置付け」、井上潤氏(渋沢史料館)「博物館における資料保存の現状と課題」の3本であった。

これらの報告を拝聴して、多様で膨大な記録史料群を現在および未来の利用者のために保存し遺していくためには、文書館・図書館・博物館などの立場の違いを越えて、共通の問題意識を持つ記録史料保存利用機関のネットワークを形成することが重要であることを特に痛感した。ネットワーク形成のためには、まず、それぞれの施設がさまざまな可能性を求めておこなっている実践に関する情報交換の場を、身近な所から数多く作っていかなければならない。その上で、各地で多様なネットワークが形成され、それらをさらにつなぐ大きなネットワークを形成することが望ましいといえるであろう。

いずれにしても、この研究集会が記録史料の

防災やネットワークの形成をおこなう上での第一歩であることはいうまでもないことであるし、この一歩の持つ意味をどれ程の大きさにするかは参加者各人の今後にかかっているといえる。この研究集会では、実行委員会をはじめ参加者の意欲と熱意を強く感じられ、筆者自身の今後の研鑽へ取り組む気持ちを新たにすることができた。研究集会がしるした第一歩をより確かな

ものことができるよう、今後自己研鑽を積んでいこうと、強く噛み締めているところである。

最後に、またの開催を心待ちにするとともに、今回の研究集会開催にあたって多大な御尽力をいただいた実行委員会の方々および興味深い報告と示唆を与えてくださった諸氏、わかりやすい通訳をしてくださった諸氏に、敬意と感謝の意を表します。(大分県立先哲史料館)